昭和54年10月

くすり博物館だより

〒483 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・058689－3111

第4号

くすりの歴史は人類の歴史

シリーズ1　昔の丸薬のつくり方

地下鉄丸の内線茗荷谷（みょうがだに）駅の改札口を出ると，正面に白い建物が目にとまります。桐山ビルはエーザイ(株)本社別館ですが，この9月末から，道路に面したショーウィンドウで，新しい展示がシリーズで始まりました。「くすりの歴史は人類の歴史」というメインテーマで，第1回目は「昔の丸薬のつくり方」です。押出し式製丸器，バラ丸法製丸器，宇津式製丸器などを使って，丸薬のつくり方をわかりやすく展示してあり，バス停が眼の前でもあるからか，立ち停まってのぞき込んでいる方が多く見受けられます。

この展示は9月から11月まで続けられ，第2回目は12月から2月までタイトルは未定ですが，お屠蘇（とそ）や七草がゆのいわれ，絵馬など展示，第3回目は3月から5月まで，薬狩りの故事にのっとり，製薬道具も併せて展示する予定です。

▼東京・茗荷谷駅前，行き交う人々の目を愉しませる

主な展示資料から

▼押出し式製丸器▲　江戸時代後期に富山の業者によって考案されたもので，熟練するには相当な年月を要しました。

◀切丸器

▶宇津式製丸器

▶錠剤の型

▲バラ丸法製丸器　ざるの内部を水でぬらし，核となる粒と粉末原料を入れ，強く回転して丸剤をつくる。

ルイ・パストゥール展　11月30日でいよいよ閉展 … お早く!!

前号でお知らせしました「人類の恩人　ルイ・パストゥール展」も，閉展が近づいて参りました。同展はおかげさまで開展以来大変好評です。

✠東京会場：梅沢記念館✠

パストゥールに関する極めて貴重な資料が一挙に，彼の祖国外で公開されるという，この画期的な特別展はまず東京で第一歩を踏み出しました。4月4日の開場式には，武見日本医師会長，Dauge 駐日フランス大使，Benichou パストゥール博物館長，内藤当財団理事長が列席，テープカットされました。

▲Dauge 駐日フランス大使，武見日本医師会長，Benichou パストゥール博物館長，内藤当財団理事長（右から）

同展を記念して4月2日，日仏会館ではBenichou 夫人による特別講演「肖像画家パストゥール－美術学校の教授」がありました。

なお，同展の模様は朝日テレビ系のネットワークで15分，ＮＨＫ教育テレビで30分放映されました。

✠大阪会場：三越✠

5月1日，岸大阪府知事，藤井大阪市助役，熊谷日本医学会長，山口大阪府医師会長，Souchon フランス総領事館・大阪経済部商務官と内藤当財団理事長の六氏のテープカットでオープンしました。

▲展示会場　隣接した特設視聴覚室では，学生などの団体がビデオテレビによって予備知識を得られるよう配慮されました。

三越劇場ではパストゥールの業績を讃える記念講演会（5月5日）も開かれ，会場もほぼ満員となる500人ほどの聴衆が詰めかけ，その年令層も幅広く，皆熱心に耳を傾けていました。

✠川島(岐阜)会場：くすり博物館✠

5月31日のオープン以来すでにたくさんの見学者があり，去年より2割増しの入館者数です。

特に目立つ傾向としては，各大学農学部，高校化学部，小中学校教員理科部会といった見学者が増えたことです。休日には保護者同伴でメモをとる小中学生も多いようです。

従来通り，医・薬学部学生や医師，薬剤師，看護学校学生，あるいは小中学校の社会見学，婦人会や老人会の見学者も多く，外国人も意外な所で見る同展に感嘆しています。

同展の主要展示品を収載し，パストゥールの業績をわかりやすく解説した図録（1000円）も，これらの見学者のよい手引となっています。

同展は，地元民放各社でもシリーズで紹介されました。11月30日閉展。

関西紀行── ベニショウ夫妻にお伴して ……

くすり博物館　古田恵子

最初に目に飛びこんできたのは，夫人の腕いっぱいの白百合の束でした。そして帽子を胸に，起ちあがっていささか古典的な初対面の挨拶をしてくださったご主人。これが，二人のエトランゼとの一週間の旅の始まりでした。

ホテルで百合の花束を預けると早速京都の街へ出かけました。ヘアドライヤーのコンセントを買うためです。日本とフランスでは，コンセントの形がまるで違います。東京を発つ時，美容室へ行ったのですが，時間に厳格な日本人ビジネスマンが「マダム，早く早く！」と繰り返すのでシャンプーだけで飛び出してきたという夫人の髪はなるほどと思わざるを得ませんでした。

ホテル備えつけのゆかたは，最初に夫妻の興味をひきました。寝巻だと聞くとご主人は，「ウララ～，モン・プチ・プペ。ヴァラ，ピイジャマア。(おや，私のかわいい人形さんよ＝夫人のこと＝こりゃパジャマだって)」と大仰に驚いてみせます。

夫妻だけで夜の街に繰り出したことがありました。翌朝様子を尋ねてみますと，ミツコシを食べたとご満悦。大阪で訪問した三越とみつ豆を混同したのでしょう。とにかく，食堂の表に並ぶ，あの本物そっくりの見本という実に日本的なものは言葉の違いを忘れさせる力がありました。

▲三越大阪支店長（左）と夫妻

日米交換展示

スミソニアン研究所・国立歴史技術博物館とくすり博物館の交換展示は，両館にとって初めての試みでしたが，重要な足跡を残したといえましょう。

《米・国立歴史技術博物館》

「伝統的日本のくすりとその絵画」(Traditional Japanese Medicine and it's Graphics)と題された“くすり博物館収蔵品展”は，医学薬学部門とグラフィックアート部門の協力によるユニークな展示でしたが，無事終了しボストンでの移動展の後，日本へ帰ってきます。

◀展示された絵びらに見入る見学者

＊　＊

《くすり博物館》

「アメリカに見る医学の歴史」展は，当初５月中旬までの予定でしたが，アメリカ側でボストン移動展要望というハプニングもあり，こちらも会期延長されました。

《最終展：東京》 くすり博物館では８月末閉展し，東京・エーザイ本社（文京区小石川）で９月10日から28日まで移動展を催しました。初日には米大使館や外資系製薬会社などから百名近い外国人が訪れ，以降の一般開放日には大学生や昼休みを利用した会社員など目立ちました。

同展の撤去は，すでに無事終了し今月アメリカに返されます。

〈特別移動展：ボストン〉

ワシントンでの“くすり博物館展”の人気は上々で，当初６月30日までの予定でしたが，同展を見た第11回国際化学療法学会の理事長，Nelson博士から，10月に開催されるボストンでの同学会に合わせて，ぜひ移動展を開催してほしいと当館に熱心な要望があり，歴史技術博物館の仲介で，この移動展が実現することになりました。

＊　＊　＊　＊

▲米・国立歴史技術博物館での“くすり博物館収蔵品展”入口には，明治政府から送られた版木を彫る人形も置かれました。

ワシントンでの“くすり博物館収蔵品展”は大変評判で，全米各地の主要紙にニュースとして紹介されました。当館で日本の資料が出品されるのは，1889年に明治政府から版画をつくる過程を示す人形を贈られて以来，実に90年ぶりでした。勿論，日本の博物館との交流は今回が初めてです。〔くすり博物館訪問のため来日したKondratas博士（国立歴史技術博物館・医学薬学部門長）談〕

＊　＊

▲９月10－28日，東京での最終展がエーザイ本社（文京区小石川）で催されました。

京都，大阪と続いた旅は好天に恵まれていましたが，奈良では暴風雨にみまわれました。同夜はＹ氏の夕食会に招かれていたので，ずぶ濡れのままやっとの思いで駆けつけると，Ｙ氏は渡仏時のアルバムを見せて下さいました。見覚えのある写真の中から，一枚を指して夫人が「Oh！フーケッツ！」と叫ぶと，Ｙ氏はけげんそうに，「不潔？ こりゃ一流のレストランですぞ」とやり返します。何とフーケッツとは店の名前でした。夫妻も日本語の意味を聞いて，七転八倒の大爆笑。楽しい旅の一夜でした。こんな調子で京都，奈良，大阪をまわり，岐阜で当館を見学し鳥羽で一泊しました。

花や動物や子供たちが大好きで，涙さえ浮かべて「トレ・ジョリ（かわいい）！」を連発していた夫妻は，今年のバカンスにはノルマンディーの林檎の樹下で，同じように美しかった桜の花を思い出し，日本や，そこで出会った様々の人（トレ・ジャポネ：とても日本的な）を思い出して下さったことでしょう。

パリっ子，ベニショウ夫妻の楽しい日本の休日でした。

パストゥール博物館長イルダ・ベニショウ夫人は，日本でのパストゥール展開催に際して，日本医師会の招待を受けてその夫君ガブリエル・ベニショウ博士と共に今春，来日しました。武見日本医師会長による歓迎夕食会を受けた後，東京会場オープニングまでの一週間，大阪三越会場の視察などを兼ねて，この非公式な旅行を楽しんだわけです。

夫妻はこの後，東京での特別講演，フランス大使館公邸でのレセプションパーティーなどに出席，無事帰国しました。

≈次回特別展の準備はじまる≈

「適塾と近代科学のあけぼの（仮称）展」が，明春開催されることになり，このほどその準備が始まりました。適塾記念会の主催で，内藤記念科学振興財団が協賛します。

この展示は適塾の解体修理および周辺整備計画の完成を記念して開催されるものです。

展示内容は

①大阪蘭学の流れ

②洪庵関係史料

③門下生関係史料　などが中心ですが，同展は東京，福岡，大阪，岐阜と会場を移す計画なので，それぞれの地方の蘭学関係資料も加味されることになるでしょう。

会期中，各会場ではこれら貴重な資料の公開のほかに，講演会や映画会(「洪庵と1000人の若者達」など予定）なども計画されています。

会期および会場は，ほぼ以下の予定です。

昭和55年	4月下旬～5月上旬	東京
〃	5月中旬	福岡
〃	6月上旬	大阪
〃	6月中旬～	くすり博物館

▲緒方洪庵（1810～1863年）
天保9（1838）年大阪に「適塾」を開いた。その門からは橋本左内，福沢諭吉，大村益次郎，大鳥圭助，長与専斎などの逸材が多く出た。

くすり博物館伝言板

◀らんびき（複製）▶

くすり博物館でご希望の方に頒布しています。

木箱入りで，価格は1万円です。文様は右の3種あります。

高さ30cm足らずの手頃な大きさで，ちょっと飾ってたのしんでいただくのにぴったりです。

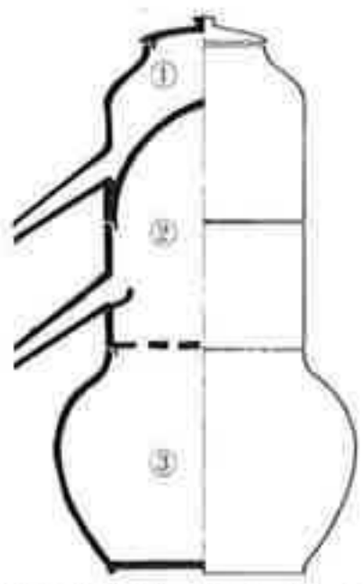
遠隔地の方には実費配送もいたします。

◀梅

鶴▶

◀葉

一口知識



①に冷却用水を入れ，温まった湯を時々管から出して蓋部から冷水を注ぎ足す。③に水を入れ加熱すると上昇した水蒸気が①の器底で冷やされ，露となって②の導出管からしたたり出る。

蘭引

16世紀後半，南蛮文化とともにもたらされた蒸留器「らんびき」は，ポルトガル語Alambiqueが語源です。

南蛮外科で傷口を洗う「蒸留酒」や薬用油水(植物精油)，化粧用香油水を造るのに用いました。また医家や薬種屋だけでなく，上流家庭でも茶席で「らんびき」を用いて蒸留酒を造り，客をもてなしたそうです。

普及していたのはおもに陶製で，幕末には瀬戸物屋の店頭に並ぶまでに一般化されました。

とぴっくす

▶図録「くすり博物館」

当館の収蔵資料を満載した美しい図録「くすり博物館」ができました。前川久太郎・青木允夫共編，A4版，160ページ（うちカラー96ページ），東京・彩巧社から，価格は9,800円で一般書店でも入手できます。

▶愛知，岐阜，三重三県博物館協会交流研究会が11月12・13日，くすり博物館で開かれます。

▶「大垣の先賢展　蘭斎と細香」が11月17－25日，岐阜県大垣市文化会館で開かれます。美濃の蘭学を紹介する同展には当館からも資料を多く出陳，また協賛もしています。

▶「薬学生のための薬史学セミナー」は去る7月26・27日，くすり博物館で開かれました。この道の先達ともいえる先生方と，若々しい学生が和気合々と語り合える有意義なセミナーでした。

館長**青木允夫**　学芸員・司書**古田恵子**(編集担当)　学芸員**井門千里**　庶務**脇田朋子**
くすり博物館 9：00～16：00開館（毎月曜日・年末年始　休館）●お問い合わせは最寄りのエーザイ支店・連絡所に